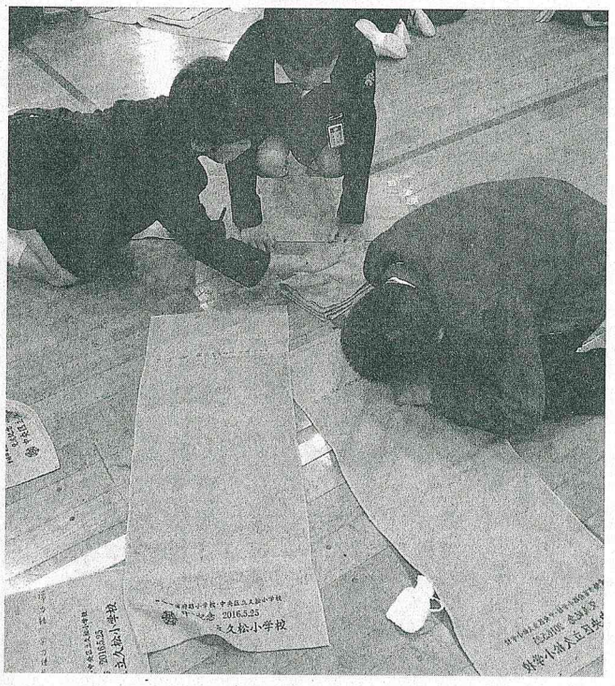
オリ・パラ教育

「人権・平和」「国際」「健康」を軸に

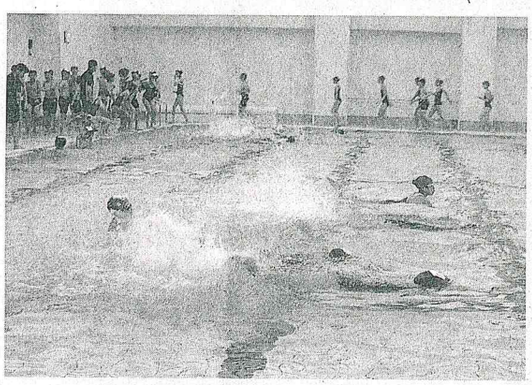
東京・中央区立久松小学校

開催後も見据え継続性重視

「人権・平和」「国際」「健康」という三つのキーワードを軸に、オリンピック・パラリンピック教育（以下、オリ・パラ教育）に取り組んでいる東京都中央区立久松小学校（酒井寛昭校長、児童600人）。2020年東京五輪・パラリンピック開催後も見据え、大切にしているのは「継続性」だ。学校として無理なく続けられるよう、これまで積み重ねてきた教育活動をベースに年間指導計画を作成。オリ・パラが持っている価値と関連付けを行ったことで、教師一人一人の「カリキュラム・マネジメント」の視点も育っているという。



異文化交流を楽しむ中国の小学生と久松小学校の子どもたち㊨、健やかな体の育成を図るために水泳などに力を入れている㊦



東京五輪・パラリンピックまで約3年。大会招致が決まった段階で、同校ではオリ・パラ教育の年間指導計画の作成に着手した。それは都や区が方針を打ち出す前で、酒井校長は「中央区には選手村が建設されることなどを考慮すると当然の流れだった」と振り返る。

「学び」の充実を図るために、大切にしたのは「これまで学校が積み重ねてきたこと」と「オリ・パラが持つ価値と重ね合わせ、これから必要になること」の二つの側面だ。

オリ・パラの価値は、スポーツや多文化理解、共生や人権に関わることなどが多くある。例えば、「人権」に関しては各教科・領域などの学習を通して、逆境に立たされたときにできることを考え、今持てる力で精いっぱい取り組もうとする姿勢を学ぶことに教育的価値を見いだした。

中国の児童と伝統文化で交流

本年度、力を入れて取り組んでいるのが「国際教育」。総合的な学習の時間を使い、4年生の子どもたちは中国の小学校と交流活動を行っている。4月には中国から約70人の児童が同校を訪れ、地域の伝統文化について一緒に学んだ。

言葉が通じなくてもジェスチャーなどを使って意思疎通を図る子どもたち。関わり合うことの喜びを味わうことなどに重点を置いたという。この他には「一校一国運動」（5年生）や他国から見た日本を知る「夢・未来プロジェクト」（6年生）などにも取り組んでいる。

「日本の良さを知ることで、外国の文化や人への理解がさらに深まっていく」

そう語る酒井校長は、地域の特色を表す「日本橋かるた」を扱った学習や「わんぱく相撲」の実施など、日本文化に直接触れる機会を積極的に取り入れてきた。日常生活では、あいさつや礼儀に力を入れて取り組んでいる。それは相手意識を高め、自然と相手を尊重する「おもてなし」となっていくためだ。

「健康は体と心から」と話す酒井校長。オリ・パラ教育を通じて心を通わせて気持ち良く生活することが健康にもつながる。今後はさらに地域に目を向け、「柔道や空手、居合いなどの素材を発掘し、子どもたちに『本物』を体験させる機会を多く設定できれば」と話している。

7月4日に研究発表会

同校は7月4日に研究発表会を行い、これまでの成果を披露する。オリ・パラ教育の取り組みに加え、次期学習指導要領でキーワードになっている「主体的・対話的で深い学びの追究」（全学年・全教科など）の取り組みも報告する。テーマは「豊かな心と健やかな体の育成」。そのテーマに迫るための一つの手だてとして小集団活動による学び合い学習などを紹介する。

久松小＝☎03・3661・6016